『北院御室御集』と『御室五十首』『正治初度百首』各守覚歌との関連性をめぐって

千草　聡

〈一〉

守覚法親王の家集『北院御室御集』は現在二系統の伝本があり、所収歌数により神宮文庫蔵他の第一系統本（一四五首所収）と、宮内庁書陵部蔵の孤本第二系統本（同一七八首）とに大別される。後者の書陵部本は守覚没後の編集本とみられるが[1]、前者は集中に『千載集』『月詣和歌集』入集歌が多く、既に下釜逸子氏[2]が、治承頃より千載集撰進の文治頃までの成立と推測されている。この時期の守覚は、不穏な世情を背景に聖教類や歌集などの収集保存に熱心で、治承二年夏頃には俊成・俊恵ら当代歌人に家集の献上を命じており、桑華書志所載「古蹟歌書目録[3]」の第十諸歌集近代掲載の諸家集がこれに該当するとみられる。先の第一系統本は当目録に記述がないが、右の諸事情からすると、これも同時期に編まれたものであろう。

この第一系統本（以下、家集と称す）を良く見ると、文治以後に催された『御室五十首』『正治初度百首』（以下、各々五十首・百首と略）の次の歌を収めていることに気が付く。

鹿

○野辺ならば柵[4]む鹿に託たまし我と散りぬる庭の秋萩　（家・五三）

霧

○音著し鹿の通ひ路これなれや霧の彼方に木の葉踏むなり　（家・五五）

前の五三番歌は五十首の二四番歌、後の五五番歌は百首の二五六番歌に各各該当し、これら員数歌は建久末年以降の編纂になるから、守覚は五十首・百首各詠進の際、家集所収の右二首を擬作歌として各々取り込んだことになる。

家集中に他の同様の例は見出だせないが、前掲二首に挟まれた家集五四番の「野花露」題歌は、これと歌の内容及び表現面で関連性の窺えそうな歌が百首秋部に見出だせる（以下傍線・波線は稿者による）。

○秋の野の千草の色に移ろへば花ぞ却りて露を染めける　（家・五四）

▽千草まで花に移ろふ上露は散るにぞ本の色は見えける　（百首・二四三）

家集歌は、草花の開花に露も色付くと詠み、百首歌はその落花により露の色も戻ると詠む。草花の咲き始めと終りという対照的な情景を詠む二首だが、秋野の草花と露との歌材の組合せは双方同じで、見方を変えれば、百首は上句で家集歌一首の内容を踏まえ、下句でその後の展開を叙したとも受け取れる。

同一情景を視点を変えて詠じた習作かと思われるほどに、これら守覚歌二首は、傍線部の語句の一致をふくめ、歌の内容・表現両面で重なる点が多い。さらにこの家集歌の直後には先述した百首撰入の擬作歌が続くから、家集で相前後する五四・五五番の両歌は、各々百首所収歌との間で、詠作上の、もしくは撰歌配列上の関連性を見出だせることになる。

五十首の場合も、先の擬作歌の直後に「絶え絶えの薄霧隠れ数消えて何時かは花の千草なりける」（秋部二五番）と、これも先の家集と百首との例に同じく、「花の千草」という秋花を示す語句をふくむ歌が配されている。五十首の秋部二四・二五番歌と、家集の五三（擬作歌）・五四番両歌との間でも、所載歌や語句の一致が見られるのである。

このように守覚の家集と、五十首・百首とをめぐっては、歌の表現や内容面から、僅かながらも類似点が指摘できそうである。そこで諸先覚の『御

室五十首』『正治初度百首』に関わる先行研究[3]を踏まえつつ、歌の表現等を手掛かりに、家集と、五十首・百首各々との関連性を粗々考察していくこととする。

《二》

家集と五十首との吟味から始める。ともに四季部と雑部から構成され、所収歌数は前者が一四五首、後者が五〇首。五十首は詞書(歌題)の記述がないため、両者の歌題配列の単純比較はできないが、その一首中の主な歌材から整理分類すると、家集と五十首の各所収歌に窺われる歌題(歌材)は、総じて四季部・雑部とも、勅撰集や『堀河百首』『久安百首』などに見られる歌題及びその配列に倣っている。各部の歌題(歌材)の配置は、若干前後する場合もあるが、ほぼ同様の順序に並べられている。

詠歌配列のみならず、家集・五十首の各所収歌間には、一首中の語句や内容等が類似する場合も散見する。それらを左に掲げ、吟味するが、便宜的に擬作歌を指摘した秋部から取り上げることとする。

野花露

◎秋の野の千草の色に移ろへば花ぞ却りて露を染めける　(家・五四)
(秋十二首)

☆絶え絶えの薄霧隠れ数消えて何時かは花の千草なりける　(御五・二五)

月

◎風渡る梢に雨の音はして月のみぞ漏る松が浦島　(家・六三)
(秋十二首)

☆深け行けば潮風寒み雲消えて松が浦浪月冴ふなり　(御五・二八)

紅葉日浅

◎何時しかは色に出でしと忍夫山下葉よりこそ紅葉染めけれ　(家・七九)
(秋十二首)

☆山陰の青葉隠れの下紅葉忍ぶ物から色に出でにけり　(御五・二三)

秋部所収歌を二首対で三組掲げたが、いずれも部分的な語句の一致が見られる例である。初めの歌集五四番歌と、五十首の二五番歌については先に触れた。家集六三番歌と、五十首の二八番歌は、秋風吹いて皓々たる月を詠じた二首で、各々「松が浦」と「松が浦島」との歌枕(地名)を詠み込んでいる。八雲御抄は前者を讃岐、後者を陸奥と注記するが、当面の守覚歌二首を除き、これ以前に当該地域の月を歌材に詠む歌は見当たらないことから、「松が浦」の月は、家集歌の「松が浦島」の月より発想を得て詠まれた可能性が強いように思われる。

家集七九番歌と、五十首の二三番歌は、前者は「忍夫山」の下紅葉が色付き始めた、後者は下紅葉が「忍ぶ」けれども色付き始めたとあって、いずれも『拾遺集』六二二番の「しのぶれど色にいでにけりわが恋は物や思ふと人のとふまで」との平兼盛歌を下敷きに、下紅葉の紅葉を詠んでいる。

これら三組の家集歌と、五十首歌とは、各々の間で一首中の語句や歌の内容の類似がみられたが、他に次のような場合もある。

対月忘愁

◎憂きながら宿らむ月を待つ程に何れは乾く袖の露かな　(家・七一)
(秋十二首)

☆昔思ふ涙の底に宿してぞ月をば袖の物と知りぬる　(御五・二九)

既掲の三組の家集歌と五十首歌は、各一首中の語句や歌の内容の類似がみられたが、右は両歌の関連性を特徴づける表現語句も見出しがたく、わずかに月を袖の涙(露)に宿すとの歌の発想を同じくする。

このような例を含め、主だった語句や歌の内容等の一致乃至は類似との観点から、五十首の秋部十二首中の四首に家集歌との関連性を窺ってきたが、次に秋部以外の部立所収歌について、同様に吟味してゆく。

梅

◎梅が枝の花に木伝ふ鶯の声さへ匂ふ春の曙　（家・十一）

（春十二首）

☆花は猶枝に氷りて鶯の木伝ふ声ぞ色は有りける　（御五・三）

羈旅霞

◎八重までは今朝ぞ霞の籠めてける笹垣薄き鄙の仮庵　（家・九）

（春十二首）

☆八重深き霞の底の鶯は声ばかりこそ谷を出でけれ　（御五・四）

海路霞

◎沖懸けて遠離り行く声すなり霞の内に歌ふ船人　（家・八）

（眺望二首）

☆目も遥に奥懸け離り行く舟は水夫の声こそ先は消えけれ　（御五・五〇）

家集十一番歌と五十首の三番歌は、ともに枝を木伝う鶯の声を共感覚的に詠出しており、続く家集九番歌と五十首の四番歌の組合せは、前者に「八重まで」籠めた霞、後者に「八重深き霞」との、同一情景を扱った類似表現が見られる。木伝う鶯の声も、八重の霞も、当該内容を詠じた先蹤歌は多いが、これも表現語句や発想の類似した歌が各々の春部所収との点で、双方の撰歌配列に窺える共通点の一つに数えて良かろう。

家集八番は春部の「海路霞」の題詠歌、五十首の五〇番は雑部の眺望二首中の一首で、双方とも沖を目指し離れ行く船を船人の声をもって聴覚的に詠じている。人麿の名吟「ほのぼのとあかしのうらのあさぎりに島がくれ行く舟をしぞ思ふ」（古今集序）を始め、遠ざかり行く舟を歌材とする歌は家集歌以前にも散見するが、その中で「沖（奥）懸け（て）」との語句を一首に詠み込む先蹤歌は、どうも見当たらないようである。まして沖合遠ざかる舟を聴覚的に詠じた歌となると、当面の歌集歌が嚆矢であり、ついで五十首歌となる。当面歌二首の大きな相違は霞の有無であり、それが各々配された部立の相違に表れているが、これらも歌の表現や内容面で類似性を窺わせる歌と見做せる。

春部や秋部に続いては、夏部にそれとみられる例は指摘しがたく、冬部や雑部に類似した表現や内容を持つ歌が見られる。

時雨

◎時雨つつ過ぎぬる方は雲消えて一つ景色に見えぬ空かな　（家・八八）

（冬七首）

☆哀れ知る眺めは一つ空ながら月の辺りの雲ぞ時雨るる　（御五・三三）

雪

◎雪の内にささめの衣打ち払ひ野原篠原分け行くや誰　（家・九三）

（冬七首）

☆降る雪を厭ふと他所に見えしとて山分衣払はでぞ行く　（御五・三五）

雪

◎何事を月に見分かん風越の雲晴れ渡る峰の白雪　（家・九四）

（冬七首）

☆富士の峰は問はでも空に知られけり雲より上に見ゆる白雪（御五・三六）

旅

◎踏み慣れぬ岩根を伝ふ通ひ路に暫し立ち退け峰の白雲　（家・一一八）

（閑居二首）

☆岩根踏む山路は苔に埋もれて雲こそ通へ人は訪ひ来ず　（御五・四四）

始めの時雨詠の場合、時雨雲の定めなき情景を取り上げた先蹤歌は多いが、それを「一つ」空との対比で詠じた歌となると、守覚以前は覚性法親王の「しぐれゆく雲にはづれてて月はひとつそらともおぼえざりけり」（出観集・五六〇）一首を数えるばかりである。右の家集八八番歌と、五十首の三三番歌も、各一首中に「一つ」空との意味内容を示す語句が見出だせるから、この覚性歌を参考に詠まれた歌であろう。それら詠歌が各々冬部に配されている。

次の冬部の家集九三番歌の場合、上句で降る雪に「ささめの衣打ち払ひ」と詠み、五十首の冬部三五番歌は、下句で降雪に「山分衣払はでぞ行く」と詠む。「山分衣」と「ささめの衣」など、歌の語句や内容は相違するが、雪と衣との歌材を一首中に配して雪中の徒を詠む点は同じである。

続く家集九四番歌も雪を詠む歌で、その下句に「雲晴れ渡る峰の白雪」とある。五十首も前掲歌直後の三六番に、下句「雲より上に見ゆる白雪」と、やはり雲上に聳える峰の白雪を詠む歌が来る。

これら二組の例歌は、いずれも当該内容を詠じた先蹤歌は多くを数え、守覚の独創的詠出とは言えないが、歌の着想や、素材の組合せを同じくする歌が双方の連続する二首に各々見られる点で、家集と五十首との撰歌配列における部分的類似を示唆しよう。

ついで雑部で旅を詠む家集一一八番歌と、閑居を詠じた同五十首の四四番歌とは、岩根を伝う通路（山路）が峰の雲に覆われる状況を設定して詠んだ二首で、右の家集歌の直後にも「余所にては通ひ路無しと見し峰を雲踏み分けて今ぞ越え行く」（一一九・山路旅行）と、同発想の歌が配されている。守覚は高野参詣に数を重ねており、これら詠歌は旅中の実景を念頭に詠まれた可能性もあろう。そのためか、雲の覆う峻峰の山路を詠む歌は家集歌以前にも散見するが、それを「通ひ路」と解しての詠は、右二首を除き見出だしがたい。

このように家集と五十首の各部所収歌を比べ、主な語句や歌の内容との観点から、双方で類似する場合を吟味し、秋部の四首をはじめ、春部三首、冬部三首、雑部一首の家集歌の例を指摘してきた。これら例歌に、先の擬作歌一首を加えると、都合十二首に及ぶことから、守覚が御室五十首を詠作編集する際に、家集所収歌およびその配列を部分的に参照していたことが考えられそうである。

《三》

次に守覚が詠進した正治百首と、家集所収歌との関連性に目を向けてみたい。守覚の百首歌は、宮内庁書陵部他蔵の編纂本系と、仁和寺他蔵の草稿本系とがあり、これらは一部の歌の配列の相違や仮名漢字の草体の誤写等の本文異同を除けば、歌の出入りなど大きな相違はないため、以下の吟味は編纂本系の本文を用いることとする。

正治百首も五十首と同様、個々の詠歌に詞書を欠くため、歌題配列における家集所収歌との比較は難しいが、一首中の主な歌材から推測すると、家集・百首間で共通して見られる四季部・雑部の歌題（歌材）については、若干前後する場合もあるが、総じて勅撰集や『堀河百首』『久安百首』といった先行歌集・百首の歌題配列に倣っていることが分かる。

そこで次に、歌の表現語句や内容、着想などの面で関連性の窺えそうな例を次に掲げ、家集所収歌と、百首歌とを吟味してみる。

郭公

○過ぎぬとも声の匂ひは猶止めよ時鳥鳴く宿の橘　（家・三四）

（夏）

▽郭公誘へと植ゑし橘に折得て来鳴く声匂ふなり　（百首・三三二）

各々夏部の歌で、万葉・古今集以来多作されてきた時鳥と橘との歌材の取合わせを、橘の香りと、時鳥の声とを通わせた声「匂ひ(ふ)」との共感覚的表現をもって詠じている。同趣の類歌は、守覚と同時代歌人である寂然歌(唯心房集・三五)に一首を数え、他に西行歌(上人集・七五六他)や家隆歌(壬二集・二一八)にも、橘に来鳴く時鳥を「声かをる」と詠む例が見出だせる。いずれも当代の共感覚的表現の用例を示すもので、右守覚歌の参考歌にもなっていようが、家集歌と百首に見られる傍線部の同語関係的な一致からすると、これら他歌人詠に比して、百首歌は内容・表現の両面から家集歌との類似が指摘できる。

朝見卯花

○今ぞ見る卯花山の花盛り明けても月の影残りけり　（家・三一）

（夏）

▽郭公卯花山の在巣して空に知られぬ月に鳴くなり　（百首・三二九）

納涼

○しはつ山楢の葉陰の夕涼折にも在らぬ秋風ぞ吹く　（家・四四）

（夏）

▽しはつ山風吹き荒む楢の葉に絶え絶え残る蜩の声　（百首・三三五）

前者の二首も各々夏歌で、家集歌は、卯花山に咲く卯の花の白さを黎明後の月明りに見立てて詠じ、百首歌も同様の見立てを用いつつ、郭公と組合せて卯花山の情景を動的に詠む。卯花山は『万葉集』中の二首(一九六七・四〇三二)で時鳥と共に詠まれて以来、当面の家集歌や頼政の「暮見卯花」題歌(頼政集・一一一)、小侍従の「卯花失路」題歌(小侍従集・三〇)まで用例が見られず、その卯の花を月光に見立てた歌となると、どうやら当面の家集歌が嚆矢となる。夏部の典型的歌材の卯の花を月に見立て、万葉以来の地名「卯花山」に掛けて用いた点に、守覚の工夫が感じられる。

後者は「しはつ山」の楢の葉を歌材に用いた二首で、百首歌は後に『新続古今集』にも採られている。家集歌は、その夕涼みの風に秋を感じると詠み、百首歌も、その晩夏の風に聞こえる微かな蝉吟を詠ずる。『後拾遺集』二三一番の源頼綱歌を始め、楢葉を吹く晩夏の風に秋の訪れを嘆じた歌は守覚以前に散見するが、「しはつ山」に取材した歌となると、数は少ない。この豊前の歌枕の用例は『万葉集』二七四番(古今集一〇七三にも所載)以来、『散木奇歌集』三一四・一三三九番、『久安百首』八九六番の俊成歌を数える程度であり、このうち俊頼・俊成は「楢の葉」を一首中に詠むが、いずれも晩夏の風に配しての詠ではない。守覚の創意が汲み取れるのはこの点で、百首歌はそうした情景を上句に踏まえ、下句で「蜩の声」へと焦点を転じて詠じている。

守覚の歌枕(地名)摂取歌は家集中に四〇首弱見られ、吉野山や衣手の杜など、大半が従来の勅撰集中に詠まれるものだが、中には右に吟味した卯花山・しはつ山など、万葉・古今以来用例希な歌枕を、卯の花や郭公、蝉という夏季の典型的な素材に配した歌も若干見られる。守覚はこれら前例希な歌枕(地名)を自歌に詠み込むことで、当該歌材を詠む先蹤歌との差異を示そうとしており、右の二組の守覚歌も、そうした例に数えられる。

海辺霧

○浦伝ふ棹の歌のみ聞ゆなり海人の伴船霧隠れつつ　（家・五七）

（秋）

▽淡路船霧隠れ漕ぐ棹の歌の声ばかりこそ瀬戸渡りけれ　（百首・三五五）

月

○遥遥と千里の外へ行く月は己が光や標なるらん　（家・六一）

（秋）

▽千里まで冴え行く月に言問はん跡無き雪は己が光か　（百首・三四七）

家集五七番歌と百首の三五五番歌は、霧込めた海面を渡る船に焦点を当て、霧中より船頭の歌だけが聞こえて来ると聴覚的に詠じた秋部の二首。この霧隠れ行く舟との情景は、既掲の『古今集』の人麿歌などを参照した詠作とみられるが、他の人麿歌に依った先蹤歌と大きく異なるのは、波線部の「棹の歌」との用語である。これは漢詩句中の詩語を本説とするもので、『和漢朗詠集』の「郷涙数行征戍客　棹歌一曲釣漁翁」（月・保胤）や、『新撰朗詠集』の「呉人棹而高歌　江波水清」（月・斉名）、同「商人棹雪歌漁浦老将踏霜立戍楼」（月・斉名）等に見られる。鎌倉期以前は、当面の守覚歌二首を除いて他に同様の用例は見出だしがたく、守覚は詠作時にこれらに依ったものと思われる。

次の家集六一番歌と、百首の三四七番歌の場合、千里まで冴え行く月を対象として、家集歌の下句は、（月は）自分の光が道標となるのであろうか、百首歌の同句は、後の残らない雪はおまえの光なのか、と各々詠み掛けている。『和漢朗詠集』の「月明千里」（雪・白賦）や、それを踏まえた平安期歌人詠など、「千里」の月を詠む先蹤歌は数多いが、その中で右二首のように「己が光や（か）」との表現を用いて月に尋ね掛ける内容の歌は、『為忠家後度百首』露上月題の顕広歌や、嘉應二年住吉社歌合の社頭月題の伊綱歌に類歌を見るものの、現存諸歌集中では当面の家集歌が初見であり、ついで右百首歌の用例が認められる。

これら二組四首は、秋部の月や霧という、これも万葉・古今集以来の伝統的典型的な歌材の詠作において、守覚が漢詩句中の詩語に依った語句や表現を用い、先蹤歌と異なる詠出を意図した例と言える。先掲の夏部の例に同じく、そうした新奇な表現を用いた歌が、秋部でも家集・百首各々に見受けられるのである。

山中落葉

○誘ひ行く嵐を道の標にて峰移りする木木の紅葉葉　（家・八六）

（夏）

▽何時の間に峰移りして過ぎぬらん一村雨の夕立の雲　（百首・三三四）

月

○峰にても雲の塵居る月影を岩間に洗ふ谷の下水　（家・六二）

（山家）

▽岩注ぐ声よりやがて驚けば夢洗ひ止む谷の下水　（百首・三九三）

木枯らしを道標に木々の紅葉が峰を移る、と詠む家集の八六番歌は、第四句に「峯」と「移る」との語を複合させた動詞「峯移りする」があり、これは百首の三三四番歌にも見られる。当動詞の用例は現存諸歌集中で当面の家集歌以前に見当たらないことから、守覚の創意がここに汲み取れる。家集歌は冬部、百首歌は夏部と、各々所収歌の部立は異なるが、冬の嵐と夏の夕立雲という、いずれも強風を伴った天候現象に関して右の表現は用いられている。

続く家集六二番は、峰にて雲の塵かかる月影を岩間に洗う谷の下水、と詠む。川波や谷水などが月光を洗うとの着想は、守覚以前の多くの歌人が詠じており、第五句「谷の下水」との名詞句も『後撰集』五五七番を始め平安末期以降多作されるが、これらを合わせた当面歌下句の「谷の下水」

が「洗ふ」との表現及び内容は、家集歌以前に他歌人の用例を見出だしがたい。百首の三九三番歌も、傍線部に同様の表現が用いられている。この場合も、家集歌が秋部、百首歌が雑部の山家詠、と各々部立が異なり、歌の内容も相違するが、各々の当該歌中に同一表現を見出だせる例である。

以上、主だった表現語句や、歌の内容等との観点から、家集歌と百首歌とを吟味してきたが、中には各々の当該歌が部立を異にする例もあるなど、それら対象歌は多岐に及ぶ。次の各二首は、当該歌の一部表現と配列順序とに各々関連性が窺える。

旅

○故郷をいとど他所にぞ隔てつる越え来し山の八重の白雲　（家・一一六）
○稲敷や鄙の仮寝は目も合はで都を夢の内にだに見ぬ　（家・一一七）

羈旅

▽跡も無く八重立つ雲に道分けて涙時雨るる小夜中山　（百首・三八四）
▽詫びつつも斯くて幾夜か過ぎぬらん仮寝慣らはぬ稲敷の里　（百首・三八五）

家集一一六番歌は、下句で越えて来た山の八重の白雲と詠み、続く一一七番歌は、上句で稲を敷いた田舎の仮寝に言及するが、百首でも、三八四番歌の第二・三句「八重立つ雲に道分けて」、直後の三八五番歌の下句「仮寝慣らはぬ稲敷の里」と、右の家集歌と各々類似した表現語句を持つ歌が並んでいる。一首一首の歌意は異なるが、相前後する所収歌間に類似表現が見出だせる点は、家集と百首との各詠歌配列における関連性を考えさせる。

《四》

類似する主な語句や表現、歌の内容や着想等を手掛かりに、家集と百首の各所収歌を吟味してきたが、ここまで家集の夏部三首、秋部三首、冬部一首、雑部二首において、守覚創意もしくは用例希な表現が家集と百首の双方に見られることを明らかにした。特に雑部の旅題歌は、連続する二首について、各々類似表現を指摘した。

百首の場合、家集に限らず五十首もまた先行作品となるが、百首と五十首との間で、同様に類似する表現や着想歌を吟味すると、両者間に限ってはその関連性を窺わせる明徴を得がたく、むしろ家集歌と五十首歌の双方を踏まえた詠歌が目にされる。

（羈旅）

▽磯枕濡るる[7]と厭はじ潮風に月影寄する松が浦島　（百首・三八八）

百首歌は下句で、潮風により月明りが寄せる松が浦島と詠むが、風により「月影寄する」媒体は、一首の内容に即すと「松が浦島」の浪となろう。陸奥の「松が浦島」は、『後撰集』一〇九三番の素性法師歌を初見に平安末期から多作された歌枕で、百首成立の正治二年以前の用例として、「松島」の月を詠む歌が前掲の『出観集』所収歌一首のほか、これも前述した守覚の家集歌と五十首歌にみられる。参考まで後者の二首を再掲しよう。

◎風渡る梢に雨の音はして月のみぞ漏る松が浦島　（家・六三）
☆深け行けば潮風寒み雲消えて松が浦浪月洗ふなり　（御五・二八）

五十首の下句の、（潮風に）松が浦の波が月を洗うとの内容は、百首歌下句に描かれる情景とほぼ同義と解せる。「松が浦」の浪は、守覚歌以前は『後拾遺集』の定頼と源光成の贈答歌（四八七・四八八）に詠まれるだけで、それも月に取材した詠でないから、この表現および着想は、覚性歌や家集歌を踏まえた守覚の創意と分かる。

右三首はどれも「松が浦島」に関わる叙景歌と解して良く、同処の月をめぐって、五十首歌は発想を転じて「松が浦」の波が月を洗うと詠み、百首歌は、家集歌に用いた「松が浦島」の語と、右五十集歌の内容とを、各

各踏まえた内容を歌っている。百首歌は部立こそ羈旅と、家集・五十首各歌の秋部と異なるが、歌の表現や着想から、後二者を参照した詠作か、乃至はその類歌と見て間違いあるまい。守覚はそうした歌を百首に配しているのである。

（春）

▽眺めても如何に語らむ梅が枝の花に月漏る春の曙　（百首・三一三）

梅を詠む春部所収歌で、第五句の「春の曙」に着目すると、この語句は平安末期以降の用例が多く、梅に配しての詠も『月詣集』三九番の覚延法師歌、『清輔集』二一番歌のほか、『正治百首』の隆信（一二〇九）・生蓮（一七一三）各歌に散見するが、一首中で「梅が枝の花」と組合せて「春の曙」詠む歌となると、先行する現存諸歌集中では、次の家集十一番歌が初見となる。この家集歌はまた、前述のように五十首の春部三番歌とも関係してくる。

◎梅が枝の花に木伝ふ鶯の声さへ匂ふ春の曙　（家・十一）

☆花は猶枝に氷りて鶯の木伝ふ声ぞ色は有りける　（御五・三）

家集歌と五十首歌とは、家集歌の第二句から第四句にかけて窺われる、木伝う鶯の声を共感覚的に表現する点に類似性を指摘したが、右の家集歌と百首歌とを比べた場合、家集歌の初句と第二句始めの「梅が枝の花」、第五句の「春の曙」との表現が、各々共通しており、これは「枝」や「花」などの語を除き、家集歌より先の五十首歌と共通する表現を除いた部分に他ならない。当面の五十首歌と百首歌との間では、表現・内容各面での類似は指摘しがたいが、家集歌十一番歌との関連性は、双方に窺われるのである。

守覚は、五十首の撰歌編集の折、家集十一番歌の共感覚的表現を踏まえた歌を配するとともに、百首ではそれら箇所を除いた、同家集歌中の他の表現語句を用いた歌を載せたようである。このように百首中には、家集歌と五十首歌双方の内容を踏まえたとみられる歌、また同じ家集歌との関連性が窺えながら当該五十首歌と和歌表現の一致が見られない歌など様々だが、少なくとも守覚が家集所収歌のみならず、五十集歌との関連でも百首の撰歌配列を行っていたらしいことは、右の事例から窺い知れる。

《五》

これまでの吟味から、守覚の御室五十首歌並びに正治百首歌の中には、家集所収歌との間で歌の一部表現や内容等が共通する、もしくは類似する場合が見られる、との結果を得た。考察対象に取り上げた歌も、五十首と百首各々十二首ずつに及ぶ。こうした表現等の類似に加え、五十首・百首へ家集歌各一首が転用されている事実を考え合わせると、守覚が五十首や百首を編む際、部分的に家集の撰歌配列を参照していたことはほぼ間違いないと思われる。

ここでは家集と五十首・百首との関連性を明確にすべく、主に先蹤歌の少ない語句や表現を手掛かりとしたが、他の万葉・古今以来の多作された一般的歌材を詠じた歌の中にも、家集と五十首、百首との間で歌材を同じくするものはある。例えば歌枕に限っても、吉野の桜（家十六・百首二一七）、滝田川の紅葉（落葉）（家八七・五十首三四・百首三一七）などがそうで、これらも家集所収歌に倣って、当該の歌枕摂取歌が五十首や百首に撰歌配置された可能性はあるだろう。

既掲した五十集・百首各歌を眺めると、歌の表現面で家集歌との関連性が窺える場合が大半を占め、それも秋部や、雑部の旅歌に、多い。殆どの場合、当該の歌集歌と五十首・百首各歌とは部立を同じくし、中には一首中の歌材や内容から、配列面での家集参照が窺われる部分も見られる。こ

れら諸々の類似点を、守覚という同一人物の編集による偶然の一致に帰す考えは可能だが、家集からの擬作歌各一首の撰入を考え合わせると、やはりその多くは守覚の意識的営為と解した方が良いように思われる。

それは五十首と百首との間に、表現・内容両面で関連性を窺わせる徴証が少なく、守覚は百首を編集する際、先行する五十首歌で参照した家集歌の表現は百首歌に用いず、用いても当該歌中の他の表現に留めるなど、歌の内容や表現面で五十首歌との重複を避けようとした節からも窺うことができよう。

百首は後鳥羽院の応制百首のため、守覚はその詠進作業に際しては、家集や五十首を参照しつつ創意工夫を凝らし、新たな詠作はもとより、漢詩句に基づく語句や、用例希な地名など、家集歌を初見とする斬新な表現や着想を踏まえた歌を百首に撰び入れたとみられる。五十首歌との重複を避けた一因も、ここに求めて良かろう。

逆に家集と五十首との間では、歌の表現はもとより、内容や配列面でも歌集との類似がそれと分かる場合が多く見られる。五十首詠進でも守覚は創意を尽くしたであろうが、御室守覚が自ら催した五十首という事情もあり、百首詠進時に比べては、家集に依った歌をそのまま配した可能性が考えられそうである。これら守覚の五十首・百首各歌は、覚延始め他の詠進歌人の詠作との関連性も窺えるが、この吟味は別の機会に譲りたい。

守覚の家集は、千載集の詠進資料目的で編まれたにせよ、以来手控え資料として守覚の歌作に用いられていたことが、右の五十首・百首との関連性の吟味から、窺えるようである。

※家集の本文の引用と歌番号は『私家集大成』中古Ⅱ所収の神宮文庫蔵『北院御室御集』により、五十首や百首のそれは、各々宮内庁書陵部蔵『御室五十首』『正治初度百首』（ともに新編『国歌大観』第四巻所収）により、私に濁点や送り仮名を振り、漢字を当てた。場合により他の同系統伝本等により校訂した箇所もある。その他の和歌の引用は新編『国歌大観』による。

〔注〕

1　拙稿「『北院御室御集』伝本考」（筑波大学平家部会論集・第五集・平成七年十一月）。

2　下釜逸子氏「守覚法親王集の研究—家集の成立について—」（仏教文学・第六号・昭和五七年二月）

3　太田晶二郎氏「桑華書志所載　古蹟歌書目録」（学士院紀要・十二号・一九五四年）。当家集に関わる他の先覚のご研究として、松野陽一氏『私家集大成』中古Ⅱ「実定」解題や、井上宗雄氏『平安後期歌人伝の研究』増補版（笠間書院・昭和六三年）などが見られる。

4　神宮文庫本所収歌の第二句「鹿か虫かに」は意味不分明なため、他の第一系統伝本により「掃む鹿に」と校訂した。

5　『御室五十首』の各歌人の詠作過程については、有吉保氏（『新古今和歌集の形成基盤と構成』三省堂・昭和四三年）や久保田淳氏（『新古今歌人の研究』東京大学出版会・昭和四八年）、兼築信行氏（宮内庁書陵部蔵『京極黄門詠五十首和歌』—『軸物之和歌写』の原巻を復元する—・国文学研究・七七号・昭和五七六月）のご研究を、また『正治初度百首』のそれは、山崎桂子氏（正治初度百首研究のために—『小侍従集別本の解題と翻刻』—・研究と資料・第二輯・昭和五四年十二月）等のご研究を、参照した。

6　家集十一番歌の第二句は、神宮文庫本所収歌に「花にうつろふ」とあるのを、他の家集伝本と、当面歌の千載集入集歌とにより「花に木伝ふ」と校訂した。

7　『正治百首』編纂本系統は第二句「ぬるにいとひし」とあるが、ここでは「守覚法親王百首」（仁和寺蔵本他）の本文により、「濡るる厭はじ」と校訂した。

（ちぐさ　さとし　福岡教育大学講師）